

文化的マイノリティのすすめ

三崎 柚香 (新聞記者)

*自分の文化について

第135回芥川賞を受賞した、伊藤たかみの『八月の路上に捨てる』より、おもしろかったところを抜粋。

「懐かしいレンタルビデオ店にいけば、関西人ぶっとうざかったと知恵子が言う。センスのいいふりをしていたけど音楽の趣味が最悪だったと敦がやり返す。昔住んでいた下井草のアパートを訪れると、訪問販売を撃退したことで悦に入っているあっちゃんは格好が悪かったと知恵子。カレーライス の 作り 方 さ え 知ら な かったと敦。スーパーマーケットにいけば、レジ袋に商品を詰めるとき、つばをつけて口を開けるのが汚かったと知恵子。賞味期限が長いのを選ぶため、牛乳を奥から取る仕草が嫌だったと敦。」(『文藝春秋』2006年9月号)

他人と生活をする事、結婚とは、つまり文化の形成だ、と高校の古典の先生が言っていたことを思い出した。同じ文化を共有する家族に守られていた高校生のあの頃は、何のこともピンとこなかったけど、親元を一度離れてみるとよくわかった。

大学四年間を他所の土地で一人で暮らし、実家に戻って半年が経った頃、何が楽って、それはもう暗黙のルールが通じることだと思った。

例えば、塩や味の素やラー油の瓶の蓋は、きちんと閉まっていない場合が多いから持ち上げるときは蓋ではなく本体を持つこと。食品トレーや空き瓶、ペットボトルはクリエイティブなものに活用する日がくるかもしれないから、捨てるなんていうもったいない考えはしないこと。救急車やパトカーのサイレンが鳴ったら、食事中であろうと入浴中であろうと反応して動くこと。水やお茶を買う、という無駄はしないこと。外食時には、必ずタッパーを持って行くこと。他人にどう思われるか、を優先する価値観は持たないこと。すべての事は、たいがい勘でうまくゆくため、秤や計量スプーン等には頼らないこと。体調が悪いときは、医者や薬に頼らず、まず自分の自然治癒力を信じて生活

態度を改めること。日常、太陽の下で動いていたら発汗するのだから、サウナや岩盤浴で汗をかくななんて不自然なことはしないこと。コンピューターやゲーム機が人間の脳を退化させてきたのに、任天堂DSで脳を活性化させようなんていう矛盾には、ちゃんと気づくこと。

山口では、なかなか理解されずに悪戦苦闘した私の文化がしっかりと根付いている喜びと安心感。自分の価値観や文化や意志を、誰がなんと言おうと肯定してくれる強さ。実家で暮らすと、ただそれだけで何者にもへこたれない自信が生まれる。自分の文化があることは強いと思う。

この時代を生き抜くキーワードは、たぶん、他人の文化に対する寛容さであると見ている。ステレオタイプのいわゆる頑固親父は到底、生き残れない時代である。

昔から、潔癖症な人が苦手である。電車のつり革を素手で触れない、なんてそれだけでこの時代を生きる資格が整っていないように感じる。誰が触ったのかわからないものは汚い、とは優性思想甚だしい。小学校の給食係では、ほとんどの子が牛乳瓶をカートから回収箱に移す作業を嫌がった。唇をつけた飲み口を触るのは汚い、からだ。その風潮の中、サッカー好きの男の子が「はよサッカーしたいもん。飲み口に指突っ込んで入れ替えたら、一番はよ終わるで」、という理由で、みんなが汚い象徴として触れたがらなかった飲み口に両手の指を突っ込んだ。私は、初めて男の子を好きになった。

他人の文化に寛容になることは大事だ、とはけっこう私達の世代には浸透していると感じる。小学校でも中学校でも高校でも、いじめや無視や陰口はもちろん存在したけど、その人の雰囲気や標的にしたもので、文化に対するものではなかった。お弁当の中身とか、食べ方とか、言葉遣い、持ち物を悪く言うことはあまりなかった。もしかしたら、それは私の育った地域性によるかもしれないが……。在日朝鮮人部落や被差別

部落があちこちにあったし、その子らも教室に何人かいたから、親や先生たちは文化を差別の対象としない教育に殊に熱心だったと思う。夜店通りと言われる大きな通りを一本入った通りは、新道と呼ばれている。在日の人たちが多く暮らしていた。細い通りは、キムチやニンニクの匂いがしていて、表札には韓国姓と日本姓の二つが掲げられていた。友達の家に行った時、小学校2年の夏に理科の実習で育てたアサガオの鉢に、太いもやしが生えられていたのには驚いた。運動会では、焼き肉セットを持ってきている家族がけっこういた。運動会と言えば、ミカンの匂いより焼き肉の匂いを思い出す。そんな中で育ったから、私は文化の違いに躊躇しない癖がつき、とてもいい場所で生まれたと感謝している。

この頃、同世代の人と話していると、必ずがっかりするフレーズがある。「どっちでもいいんじゃない」、「人の考えていろいろだからね、仕方ないよね」、「いろんな意見があるんだから、あんまり言うことじゃないと思うよ」、等々である。この保守的な、無難な感じにがっかりきてしまう。争うことや意見をぶつけ合うことを避けて、寛容なふりをして優等生ぶって逃げてしまう。こちらが、熱い、暑苦しいほど、腹立ちや理不尽や不条理を言葉を尽くして訴えているのに、それはないだろう、と思う。別に同調して欲しいなんて言ってない。反対意見でもいいから同じくらい熱くなってほしいのに。熱くなれない人や、熱いことを冷めた目で見ている人とは、つきあえないと思う。その人たちは、他人の文化に寛容であることは干渉しないこと、としているのが大きな特徴。そういう人が増えてきたら、差別や偏見は無くなるのかもしれないけど、でもなんかおもしろくない、と私は未来を悲観してしまふ。

こういう人が増えてきているのは、差別は駄目だ、という教育が徹底されてきた証拠でもあるだろうし、グローバル化が進んだ現代の象徴でもあると思う。他の文化をポジティブにおもしろがる能力は、私らの世代は特別に求められてきたものだ。だからこそ、本音はポジティブにおもしろがれない人は、寛容なふりをしてうまく逃げるしかないのかもしれない。他の文化に寛容な態度でありつつ、干渉するほどの関心を持たないこと、が現代人が世を生き抜く秘訣の、いわゆるコミュニケーション力という気がしてならない。

*育った環境について

私の家は二世帯住宅一戸建てで、父母の生活と祖父母の生活との二つの文化の中で大きくなった。醤油やソースを祖父母は食卓の上に常備している。しかし、それを母は「汚い」と言い、醤油やソースはキッチンの棚に収納されているものだった。きれい好きの母と常識者の父との生活を窮屈になった時は、私も弟も大雑把で万事適当な祖父母の生活に逃げた。祖父も父も母も、それぞれ二流ではあるが大学を出ていて、うちはなかなか近所ではインテリだったのだと思う。それを幼心に感じたのは、友達の家に行った時だ。

文化住宅と呼ばれる長屋が多くあって、その一つ一つは風呂もトイレもなしの2部屋でできている。そこに家族四人で暮らしている、というのが私の育った地域のいわばスタンダードだった。夕方過ぎになると、チャリンコの前かごに洗面器なんかを乗せて銭湯に行くことになっている。風呂は家で入れた私や弟は、そのことが羨ましくて羨ましくて、月に一回は、近所の「白玉温泉」に連れて行ってもらうことにした。おもしろいと思うのは、そこでは風呂付きの家に住む私達がマイノリティであったこと。「ゆかちゃんとはインテリやから」とおばちゃんらによく言われた。インテリ、であるらしいことがとっても嫌だった。二部屋に家族四人で暮らし、銭湯に行く生活にめっちゃくちゃ憧れていた。

文化住宅の友達の生活は、私のそれと大きく違い、いつもドキドキしていた。まず、玄関が狭いから、靴が整理されておらず、乱雑に脱ぎ散らかされている。食器棚や本箱、ベッドなんてものはなくて、卓袱台の上にマヨネーズが転がっている。洗濯物を窓いっぱい干しているから、なかなか光りが室内に入らない。ハサミやらランドセルやらおばちゃんの化粧品、おっちゃんの靴下までが畳の上に散らかっていて「適当に座ってや」と言われても、一体どこが座る場所だと思っただけなのか、まるで見当がつかない。別世界だった。子供心に、この家で育ったらたくましくなる予感があった。家の中にジャングルジムやブランコがある我が家が、なんとも甘い、ふにゃけた環境に思えて、自分の育ちにコンプレックスを持った。大きくなったら、絶対、トイレも風呂もない文化住宅に住む、と決めた。実は、今でも、文化住宅で暮らすのが夢である。

中学までは、嫌々ながらも我が家がインテリ、であると思っていた。それが、パリんと砕けたのは高校入

学後すぐだった。京都の本物のお嬢さん高校は、本物のお嬢さんたちがうじゃうじゃいた。父が京大教授の人、母が東大卒業の人、父母ともに医者の人、家が国宝の寺院という人、遠縁に梨園がある人、BMWで送迎してもらう人、等々。うちなど、インテリでもなんでもなかった。

文化住宅暮らしの人たちや、医者や弁護士の娘たちと過ごして良かったと思う。大阪の端っこの町では、文化住宅暮らしが一般的だから、彼らは決して卑屈にならず主義主張をはっきりさせていた。また、お嬢さん高校では、みんながインテリだったから、インテリであることに謙遜を持つ必要もなく、それぞれが主義主張を振りまいていた。主義主張を持つ人が好きだ。その考えや価値観には賛否あるけれど、とりあえず主義主張を持ち、それを口にしていない人たちに囲まれていることは幸せだったと思う。

*マイノリティのすすめ

大阪と京都、山口と私は、わざと自ずからマイノリティを選んできた。インテリ、中流、都会人、と。マイノリティの不条理さはもちろんわかってはいたけど、マイノリティの自由さに魅力を感じていたのだと思う。仲間がない、とは仲間に合わせなくてもいいことと同じで、その自由さは何ものにも代え難かった。マイノリティであるからこそ、躊躇無く主張できることは絶対あるはず。そして躊躇無く、主義主張を振りまく大切さを感じる。他の文化に寛容になる基盤とし

て、自分の文化を満喫できる環境が整っていることが条件だからだ。多数のマイノリティからできる社会が、最も刺激的だと思うし、何より各家庭に各文化が存在するのだから、それぞれがマイノリティであって当然なのだ。

友人であったり、恋人であったり、多くの人と接する中で、その人にしかない文化を見つけた時、たまらなく嬉しくなる。砂時計できっちり計って、ちょっぴり三分間の歯磨きを欠かさない人。親御さんにしっかり躰けられてきた跡が見えて、家族アルバムを垣間見たような親しみを覚える。ボディソープやハンドソープを使わず、石鹸にこだわってる人。きつと育ったところも、石鹸が常に買い置かれていた家なのだろうと想像する。ホテルから取ってきた小さいシャンプーや、安っぽい歯ブラシを大事にしてた人。他人の目を気にする性格だったくせに意外だった。謎のウインナーのぬいぐるみをカーテンレールに飾っていた人。なんだったのだろう。朝ごはんを食べない彼と食べる彼。食べない彼の方が優しかったが、朝ごはんを食べる習慣がないことは、私にとって許せないものに思えた。クレジットカードで成り立っている財布を持っている人。田舎者みたいだと、内心バカにした。ケロップの下敷きを持っていた人。物持ちの良さに尊敬を覚えた。マイノリティであることを恥じず、恐れず、自分の生まれ育った家にあつた文化をもっと示してほしい、と思う。